

人が消えた街に人が戻ってきた。新型コロナウイルスの流行が収束してからさして時間が経つ間もなく、街はあたかもコロナ禍などなかったかのように活気づくようになった。コロナ禍を経て、仕事も会議も勉強も、ショッピングも遊びも、じつに多くのことがウェブでできることを人びとは体験したが、気づけばいつの間にか、学校や会社に通い、街に出かけている。ヴァーチャルではないリアルな都市生活を、むしろこれまで以上に謳歌しているようにもみえる。

東京を歩けば、訪日外国人の増加も手伝って、繁華街はもとより電車も飲食店も、どこもかも人で溢れている感がある。街から人がいなくなった情景がもたらした恐怖の感覚は、もはや混雑による不快感へといつの間にかとって代わられてしまった。人間の感覚は勝手なもので、それゆえに都市におけるバランスは難しい。いずれにしてもコロナ禍というひとつの危機の時代を超えて、私たちはあらたに、またさらなる未知の時代を経験しはじめたといえるのだろうか。

とはいえ、のんきに安心していられる状況にあるわけでは決してない。戦争や災害、地球環境をはじめとする世界中に存在する多様な危機は、グローバルな時代にあつてどれも他人事ではなく、日々身近に迫っている。実

際私たちの暮らしに直結する日常の諸問題は、日本経済の不況、政治不安などさまざまな要因も相まって、増大するばかりである。こうした時代のなか、人々が心安らかに、豊かに、幸せに生活できる都市とは、どんな所なのだろうか。

パリは大々的な都市計画による近代都市を最初に実現した地として知られるが、オリンピックの開催年でもあった二〇二四年、シャンゼリゼ大通り地区の大規模な改修案を発表している。建築家フィリップ・キアンパレッタ氏の提案によると、現在の片側三車線を二車線に減らし、代わりに二車線の自転車専用レーンを設け、歩行者用スペースを一三パーセント増やす。同時に百六十本の植樹を行い、コンコルド広場周辺を庭園化し、子どもの遊戯施設などを設けるといふ。イメージ動画をみると、これによりシャンゼリゼ大通りは圧倒的な緑化が実現され、まるで森のなかにいるような空間へと大胆に変容しているのに驚かされる。動画では、いたるところ子供たちが遊び、人々は自由に散歩し、人々と出会い、話しこみ、芝生に座ってくつろいでいる。大通りはたんに移動のために通り過ぎる場所ではもはやなく、生活の場の一部となっているのだ。こんな都市が出現したら何と素敵なことだろう、と思わず惹きつけられる⁽¹⁾。

動画をみていて、欧州留学から帰ってきた学生が筆者にこんなことを言ったのが思い出された。「パリには街中カフェがあつて、ロンドンには街中公園がたくさんあつて、いつでも友達と話をする場を見つけるのに苦労しないのに、東京では、人と人とがゆっくり話す空間、ないですよね」と。あちらこちらで再開発が進む東京だが、パリのシャンゼリゼ大通りの計画に比し、たしかに人びとが交流したりくつろいだりする場は、いまだあまり考慮されていないかのようにみえる。落ち着いて話ができるようなカフェは少なく、行列だらけでしばしば入れず、公園がどこにもあるわけではない。東京はどうしてこんなに余裕がないのだろうか。

コロナ禍の収束後、私たちの価値観は少なからず変わったに違いない。これからの未来は、何が幸福で、都市はどうあるべきなのか。アートはそこでどう関わるができるのか。都市生活がもたらす理想の未来像を思い描くには、過去から学び、現在を見つめ、将来を構想することが今こそ必要だろう。

*

本書は、「都市」について、さまざまな問題や視点から多角的に見つめた論考を集めたものである。執筆者は、早稲田大学総合研究機構・プロジェクト研究所のひとつ「都市と美術研究所」に所属する研究員、招聘研究員を中心に、研究所が開催する研究会やシンポジウムに参加してきた専門家たちで構成されている。

本研究所は、「都市」と「美術」の関係を横断的に研究することを目的に二〇一六年に開設され、美術を核としながらも、都市全般に目を向け、都市について広く考察してきた。都市に関わる問題は多彩な分野にわたり、土木、建築、社会学、デザイン、美術、文学、思想、哲学など、理工学から人文学まで多様で幅広い要素を含んでおり、個別の領域のなかでは捉えきれない横断的な課題が少なくない。そこで本研究所では、これら諸問題について複合的な視野を得られるよう、分野の異なる専門家たちが交流することで考察の幅を広げるべく活動を展開してきている。とくにここ数年は、地方都市と美術の問題に焦点を当て、美術館や芸術祭を対象に、研究会で考察・意見交換する場を設けてきた。同時に研究所では、「まちあるきワークショップ」で、東京の各エリアに関する調査を行っており、これまで丸の内、天王洲、西新宿をとりあげ、調査内容を報告書としてウェブおよび冊子にまとめている。本書はこうした活動を背景に参加者が各々展開してきた成果を一冊にまとめたものだが、研究所の活動の中には他にも、本書には収めきれなかった多くの興味深い発表や研究があったことを記しておきたい。

なお研究所では二〇二二年、最初の論集『危機の時代からみた都市——歴史・美術・構想』を同じく水声社から出版しており、本書はそれに続くものとなる。執筆者の大半は、前書にも執筆をしているが、新たに加わった執筆者もおり、両書を合わせて内容の幅がさらに広がったと考える。読者の方にはぜひ前書もともに手にとっていただければ幸いである。

各論考は、社会学、国土学、建築、都市計画、地域研究、美術史、美術評論、古典学など執筆者の専門領域を基盤においているが、独自の視点に加え、専門領域に留まらない自由な展開をみせているものも少なくない。個別の領域の専門書には入らない内容の展開も見出すことができるのは、本書ならではの興味深い特徴といえる。また論考はどれも、時代や地域を超えて、現代の日本の都市や社会における課題、あるいは人間の本質についてなど、身近で普遍的な問題を考えさせる要素を含んでいるのも特筆すべき点といえよう。

本書は、内容の多様性と広がりによって、都市に関わる思考・論考の「コラージュ」ともいえるものである。それはちょうど、さまざまな異なる断片を自在に組み合わせて一点の作品として構成する美術作品におけるコラージュのように、一篇ずつは独立して異なる内容を議論しながらも、論集全体として眺めてみると、ひとつの面白いコラージュ作品になっていることを願いたい。断片の寄せ集めは、じつは都市の本質を物語るものでもある。

註

- (1) <https://www.lesechos.fr/industrie-services/immobilier-btp/plus-de-verdure-plus-despace-pietons-plus-damonnations-150-propositions-pour-revitaliser-les-champs-elysees-2097532>; <https://www.pca-stream.com/en/news/more-vegetation-more-pedestrian-areas-more-entertainment-150-proposals-to-revitalize-the-champs-elysees/> (二〇二五年四月三〇日最終閲覧)
- (2) 以下を参照。都市と美術研究所ホームページ: <https://pjf-cityandart.w.waseda.jp/>